

香取遺産

Vol.117

おおくらみなかいづか
大倉南貝塚

縄文時代後期の大型貝塚

閩生涯学習課

☎(50)1224



▲大倉南貝塚出土の土器

大倉南貝塚は、大倉字井戸谷にあり、標高約40mの台地の南斜面に貝層が形成されています。

昭和29年に早稲田大学の西村正衛教授により発掘調査が行われ、貝層の範囲は径18m、厚さは2mであることがわかりました。また、部分的な調査ではありましたが、1万6千点以上の縄文土器片をはじめ、石斧・石鏃・磨石などの石器、ヤス・釣針などの骨角器、貝殻を加工して腕輪とした貝輪、土偶、動物骨や土で作った装身具など、多種多様な遺物が出土しています。

土器は縄文時代後期（約3千年～4千年前）のものが大半で、中には東北地方との関係がうかがえる土器も見られます（写真右下）。また、骨製のヤスや貝輪が多いことも特徴的です。ヤスは縄文人の盛んな漁労活動を物語っており、貝輪は交易品として大量生産されたものでしょう。

縄文時代の海岸線は現在より高く、現在の利根川付近に広い内海

があったことは良く知られています。本貝塚から出土した貝殻や骨を見ると、ハマグリ・アカシなど海水産の貝が多く、内湾と外海の魚骨が同じ割合で出土しています。このことから、当時の香取市付近は、外海と内湾の両方で漁ができる場所、つまり湾口に近かったと考えられます。

大倉南貝塚は台地斜面に形成された地点貝塚ですが、同じ台地上には大倉東貝塚・中貝塚・西貝塚といった同時代の貝塚があり、大倉貝塚群と呼ばれています。この4カ所の貝塚の分布範囲は径100mに及び、本来は一つの大型貝塚と考えられます。このような縄文時代後期の大型貝塚は、市内では他に貝塚地区の良文貝塚が挙げられるのみです。この二つの貝塚は、香取市のみならず、利根川下流域を代表する縄文時代後期の大型貝塚と言えます。

大倉南貝塚は、昭和45年に市の史跡に指定されました。